



山下公園

## 目次

### 第1部 横浜の開港と発展:近代的まちづくりとしての公園のはじまり

P5-6 開港と日本初の西洋式公園の誕生

### 第2部 震災と戦災:苦難を乗り越え都市の骨格となる公園を整備

P7-8 関東大震災からの復興 / 計画的なまちづくり

P9-10 第二次世界大戦と公園緑地

### 第3部 急激な都市化:市街地が拡大する中で緑を守り、オープンスペースを確保

P11-12 緑行政の一本化を目指して日本初の「緑政局」誕生

P13-14 急速に進む都市化の中での公園整備

P15-16 全国に先駆けた横浜の「都市農業」

P17-18 郊外の緑を残す / 横浜の原風景を守る取組

P19-20 新しいまちをつくる / 六大事業と緑

### 第4部 成熟する市民文化と多様化するニーズ

P21-22 横浜らしい景観を創る多様な緑

P23-24 楽しむ・学ぶ・守る / 横浜の市民力

P25-26 あらたな手法・あらたな賑わい

P27-28 緑豊かなまちを次世代へ / 横浜みどりアップ計画

### 市民が主役の横浜緑政史

横浜市民の緑への意識はとてもアクティブだ。

その昔、私が紅顔の美少年のころ、船が大好きでトリスおじさんのイラストで有名な柳原良平さん、有隣堂の松信さん、ゲート座の岩崎女史、あじさいの里「白鳳庵」の川口さん、それに私と初代緑政局長で助役も務めた大場さんが車に分乗して市内を走り回った。横浜市緑の協会が企画していた「ヨコハマ街かどの緑コンクール」の審査会。人生経験の滄蓄と横浜愛がほとぼしる議論が夜遅くまで続いた。

今、「横浜みどりアップ計画市民推進会議」の座長をしているが、喧々譁々、その討議の熱さは変わらない。それこそ横浜の凄さは、市民ファーストの緑政にある。

港都ヨコハマの緑の150年史、その第1ページは西洋式公園の嚆矢たる山手公園の開設（明治3年、国指定名勝）、英国人R.H.ブラントン設計の彼我公園の開設（明治9年、現 横浜公園）など日本人の眼前に西洋文明に見える化する形で始まった。しかもここには、彼（外国人）と我（日本人）の共生と交流の場づくりの思想がみられること、当時生糸貿易をしのぐ植物交流の活況があったことなど、国際グリーンビジネス事始めも特筆される。

その後、横浜市は震災と戦災からの復興、そして高度経済成長に伴う都市化圧を克服すべく多彩な緑環境の政策と事業に取り組んできた。

その詳細は本文に譲るが、敢えてここで特筆したいのは「緑とオープンスペースの本義」に基づく全国唯一の本格的な緑行政を実行してきた点である。

緑とオープンスペースの本義は、市民の生命と生活を守り支える“生命と環境のインフラ”にある。そのために横浜市は「緑政局」（昭和46年）を設けて農政、公園、緑化の総合行政を可能にし、さらに「環境創造局」（平成17年）となってからは、緑のみならず水循環をも包含した「横浜市水と緑の基本計画」（平成18年）を策定したうえで、環境先進都市・横浜への着実な道筋と財源確保のために「横浜みどりアップ計画」と「横浜みどり税」（平成21年から）に取り組んでいる。

緑、グリーン（green）の語源は、アーリア語のghra、即ち“成長する”という意味である。成長、つまりは“生命”。21世紀を生きる横浜と市民のための生命感あふれる環境の持続可能性の根源は、“緑（greenery）”にある。

本市における緑政史は横浜市民の誇りである。次代を担う浜っ子のみなさんにも読んでおいてほしいと切に願う。

横浜市環境創造審議会会長 しんじ いそや  
 福井県立大学学長（東京農業大学名誉教授） **進士 五十八**

#### 表紙について

ひが 彼我公園（現 横浜公園）の開園当時の平面図を図案化したものです。彼我公園は、山手公園に続いて造られた日本で2番目の西洋式公園であり、外国人と日本人双方に開かれた最初の公園です。

日本の玄関口として世界に開かれ、常に新しいことを取り込んできた横浜を象徴する公園といえます。

#### 裏表紙について

市の花「バラ」は、花と緑あふれる横浜を創造するシンボルとして平成元（1989）年に市民により定められました。西洋バラの多くは開港間もない横浜から日本へ上陸したといわれ、以来市民に親しまれています。